

2011年3月11日

——ひとりの帰宅困難者の足どり

野川 義秋

新宿駅の山手線外回りのホームで、私は池袋・上野方面の電車が来るのを待っていた。

—— あーあ、今日はまたここに帰って来なければならぬ。用事がきのう済んでたら、舞い戻って来なくてすんだのに……

滑りこんでくるメタル色の車体を恨めしげに見ながら、肩にかけてリュックサックを手を持ち替える。今夜は甲州街道脇の居酒屋で、区画整理事務所時代の元同僚数人と一四、五年ぶりに会って飲むことになっていた。たった今、東京都庁

の第二本庁舎に行ってもらってきた二通の『工事完了届』の書類だが、本当なら昨日来る筈の出張だった。しかし、担当した防災便所改築工事の請負業者の手違いが原因で今日になってしまった。知事印を押した書類を抱えたまま飲み会に出るわけにはいかない。しかも今日は金曜日、来週の月曜日まで自宅に持ち帰らなければならないから尚更である。とにかく、上野の事務所に戻って出直すしか手はない。

乗った車両に空席はない。私は吊り革につかまりもせず、開いているドアの方を向いて発車を待った。何気なく、おや

っ？　と思つて車内を見まわすと揺れている。お客が乗つてくる時の横揺れかなと思ひながらそのままじつとしていた。その時だった。途端に振幅は大きくなり、とつさに握棒にかまつた。

——　じ、地震！　——

こらえながら外を見た。架線が大きく揺れていると同時に、ヒュンヒュンと鈍い唸りを発しだし、次には架線同士がぶつかりあつてバタバタ鳴つている。握棒をしつかりつかんで静まるのを待った。しかし、激しい揺れはいつもの地震よりずっと長く続いている。静まりかけたなと思つてほつとする間もなく、再び揺れがきて、すかさず電車から下りてくれという構内アナウンスが流れた。

『危険ですから蛍光灯などの落下物の下をさけて避難して下さい』

次第に緊張をはらんでいく男性駅員の声が、繰り返し繰り返し構内を駆けめぐる。ホームは人もまばらで、小走りに階段の方へ行く乗客もいる。下りた私はリュックサックを頭に被り、天井の落下物をさけて階段の下に身を寄せた。地震は長く一分という、もう静まるだろうと思ひながらその場に立ちつくした。

『乗客の皆さまに申し上げます！　駅構内は危険ですので

外に出て下さい！　安全な場所へ急いで移動して下さい』  
脅えたようなざわめきの中を急ぎ足で南口へ向かう。まだ構内アナウンスに対して半信半疑なのか、改札の内側に留まろうとする大きな人垣が改札口をふさいでいる。その人たちが外へ誘導しようとする駅員や警備員の浮き足だった声が飛びかう。その人ごみをかき分けて改札を抜け、今度は外にたむろする人だかりをすり抜けて、甲州街道の信号を渡った反対側の広場へ移動した。

——　ただごとではない　——

とつさに、阪神・淡路大地震の倒壊したビル群の映像が浮かんできて、自分が立っている広場を取り囲むように林立しているビルを見上げた。倒壊するか、そうでないにしても、落下物や飛び散ったガラスの破片が降ってくるかもしれないという不安が頭をよぎる。上空は、雨が降ってくる気配はなかったが、薄灰色の雲がかかって夕方近くに思えるくらいに暗い感じがする。

とりあえず広場に避難できた安堵感と肌寒い空気のせいもあるのか、にわかに小便をしたくなつてきた。駅構内は入れないのでトイレは使えない。ふと、南口から都庁へ行く時に何度か通つたことのある地下商店街の片隅にあつたのを思い出した。電車の復旧の情報も知りたかつたこともあつて、甲

州街道を渡って改札口のようすを覗いた。外側は人が右往左往しているが、駅構内は、発生時点ではあんなにいた駅員や警備員の姿もなく閑散としている。

—— もう少し待つていれば、ノロノロではあつても間引き運転ぐらいはするようになるはずだ ——

そう自分を慰めてみる。しかし、期待する事態とはほど遠い空気に包まれた状態だ。広い歩道を埋め尽くしている人だかりの中を、いつもなら七、八分で行けるところを、二十数分かけてやっとたどり着いた。地下通路にも人が流れこみ始めており、壁にもたれかかったり座りこんだりして、携帯のキーを操作している。トイレも、男はそうでもないが女性の方は小さな列ができていた。

小用をたして広場に舞い戻った時、時計を見ると四時である。自宅に在る連れ合いと、テレビの仕事でロケに出ているはずの娘のようすを知るためにメールを送る。連れ合いからはすぐに返ってきて、家の中の棚の物が落ちてきて大変だということや、飼っているチャーといううさぎが驚きで目をひんむいていること等が綴られている。家の中で飼うようになって今年で一四歳になる雄だ。私は、リビングのジュエターの上あたりできよんとしている姿を思い浮かべた。娘からは何も無いが、恐らくロケ先から移動するバスの中なのだ

ろうと思った。

その後、事態が動くようすのないまま時間は過ぎていく。五時をまわり、辺りはますます陰ってくるし体も冷えてきた。ここにこうしていても仕方がないので、帰れなくなった場合のことを考えて都庁へ引き返すことにした。第二本庁舎に着いた私は、ロビーに備えつけられた公衆電話から、上野公園の中にある事務所へ電話した。係長の話だと同僚の曾根崎も庁舎内にいるので、一緒に待機するようにとのことだ。再任用として勤務する東部公園緑地事務所を所管するのは、東京都建設局の公園緑地部で二十三階である。

エレベーターに向かいかけ、にわか飲み物が欲しくなると、せかせかと人が動き回りいつものゆつたりした雰囲気と大違いだ。すれ違う若い男性職員が抱えている買い物籠はどれも品物がごぼれんばかりである。買出しに来ているんだ！ そう直感した私は、二十三階もほとんど帰れずにいるのだろうかと思い、ペットボトルやもう棚にまばらにしかない煎餅・スナック菓子・インスタント食品などを買いこんだ。そしてエレベーターのところへ行きボタンを押すのだが、ランプが点灯しない。別なところを押しても同じだ。

「あおう、エレベーターは動きませんよ！ こっこの階段を

使ってください」

女性職員に言われるままに非常口のドアを開けた。すると声高にしゃべりながらバタバタと下りてくる若い職員らしき二人連れが目の前に現れた。

「この階段を二十三階まで……」

一瞬ためらって足が止まった。でも行くしかない。観念して上り始めたが、五階六階と上って行くうちに、買い物袋と肩にかけたリュックサックの重みが体にかかるようで、息が切れて上り続けられない。階段のところに止まると下りてくる人の邪魔になるので、いったん廊下に出て額の汗を拭い、一呼吸入れてからまたゆっくり歩きたす。すれ違うのが若い男性ばかりなのは、買出しや使い走りになりだされたらしいことが、すれ違いざまの会話の断片でわかってきた。

—— 鹿児島から十八歳で上京して四十二年間、一度も本庁勤務をせずに勤めあげたこの俺が、退職してからこの階段を二十三階まで上るはめになるなんて…… —

またはつきりしたことは分からないが、都内の鉄道網が完全に麻痺してしまうような大きな地震に遭遇していることよりも、業者の手違いで今日来る破目になったことの方がよっぽど腹立たしい。

—— すみません 野川さん、本庁に行くのを明日にしても

らえないですか…… —

昨日、都立砧公園の便所の改築工事業者から告げられたことを聞いた時の恨めしさが増幅してくるばかりである。私はそれをふりはらう気持ちで、階段を一段一段上っていった。

汗まみれになってやっと二十三階に着き、フロアから聞こえてきたのは石原知事が三選出馬を表明したテレビのニュースだった。工事係に行くとすでに係長のところに上野の事務所から伝言メールが届いていて、着払いのタクシー券を用意するから、曾根崎と二人で上野へすぐに向かへとのこと。しかし、ここへ舞い戻って来る時に見た幹線道路は渋滞していた。例えタクシーを拾うことができたとしても、身動きできない状態に巻きこまれるのが関の山のような気がする。それに、いつまた大きな余震があるかも知れない今の段階では、下手に動かない方が身のためのように思える。それよりも何も、たった今やつの思いで上ってきたこの階段を下りて行って、またここまで上って来るようなことだけはしたくないという思いが強かった。幸いなことに、この庁舎のさらに上の階で行なわれていた会議に出席していて、帰れないでいる筈の同僚の曾根崎の姿はまだこのフロアには見あたらない。彼が来たら相談するとの理由で、もうしばらくここに待機するゆえの返信メールを送ってもらうことにした。

ただっ広いフロアは、机の上に本立てや書類等の収納ボックスを置くことを禁止されているので異様なほどに見晴らしがよい。もう八時を過ぎているというのに、通常勤務に近いくらいの居残り状態で机に向かっている。いつもと違うのは、防災服を着た管理職や係長達が対応に追われて、フロアの中を行ったり来たりしているところぐらいである。

「帰宅難民になってしまっただけ。どこにも行くところがないので、やつかいいになります」

私は、上野の事務所まで昨年の三月まで一緒だった人や、退職するまで勤めていた吉祥寺の都立井の頭公園の中にある西部公園緑地事務所の元同僚の数人と、事情交じりの会話を交わした後は、すすめられた椅子に腰掛けていただけだった。予定されていた飲み会の方も、この事態だから中止に決まっていると判断して連絡もとらないままだ。

まわりから聞こえてくる声も、今日はもう帰れないという諦めの声が大半のようである。まれに、都庁舎の近くに住んでいて歩いてでも帰れるのか、若い女性職員の人かがぼつぼつと、気をつけてとか頑張つてとかのエールを背に階段へ向かったぐらいである。その後姿を見送りながら、もし上野の事務所へ戻れなかったら、ここよりも二十五階にある組合事務所にお願いして、ソファにでも寝かせてもらおう方が気

がねしないですむかもしれないなどと、思いをめぐらせていた。それか、甲州街道から靖国通りへ出て歩いて事務所まで帰る手もある。ただ、歩いたことがないので、どれぐらいの時間を要するのか見当がつかない。

同僚の曾根崎がやつてきてしばらく経った頃、地下鉄銀座線が動き出したとの情報が入ってきた。だが、三時ちよつと前に発生した大地震後、最初に運転を再開した交通機関ということで乗客が一斉に押し寄せて混乱したのか、また見合わせになったようだ。

一〇時になろうとする頃、今度は都営地下鉄大江戸線が動き出した。するとすかさず、上野の事務所の係長から帰つていとの伝言メールが届いた。ぬか喜びだった銀座線のこともあるし、腰を持ち上げていいのか迷った。それに、どんな大きな余震が起こるかも知れないという気持ちを抱いて地下鉄に乗ることに一抹の不安がある。ただ同僚といっしょならと思つていたところに、都営新宿線が一部の区間で動き出したとの情報が入ってきたら、都内に住む彼は自宅へ帰ると言い出した。そのことばを聞いた途端に、私の中にためらいの心が頭をもたげてきた。というのは都庁まで来るのに大江戸線はまったく言っていないほど利用していなかった。だから、今いる第二本庁舎からどう歩いていけば都庁前駅に辿

り着けるといふ道筋は頭に入っていない。

「じゃあ、とりあえず行ってみますか」

「う うん……、そうするか……」

心もとなない返事をして立ち上がり、周囲への挨拶もそこそこ非常に階段を重い足どりで下りはじめる。この庁舎は廊下や階段に部署などの表示が一切なく、ただ白い壁に囲まれた灰色のコンクリート階段は、まるで地底まで続く穴に取りつけられたラセン階段のようだ。私は曾根崎に続いてその薄暗がりに向かって黙って下って行く。

この建物の不案内さは評判で、滅多にしか訪れない私などは普段でさえ目的の部署に行くのに心細くなるほどだ。おそらく、やってきた都民の中には、目的の担当部署にたどり着けなくて、庁舎の中を右往左往する人もいるだろう。私は、今何階辺りなのかも分からないまま出口をめざしてただ歩く。唯一の救いは真つ暗闇でないことで、これは緊急事態に備えられた自家発電装置のお陰か。

「ロビーは帰れない人に開放するとかで、通らないでくれているよ」

先を歩く曾根崎が扉を押すと同時に言ったことばに、うつろな返事をしただけだった。玄関口へ向かいながら下のロビーを覗くと、段ボールを敷いて座っている年配の女性や老人、

壁にもたれかかっている数人の男性などの人影があちこちに確認できる。差入れをコンビニエンスストアで買った時間帯のガラソとした状態とはうって変わった光景がそこにあった。

「じゃ、僕は都営新宿線なのでこっちへ行きます。大江戸線はこの道を行けば駅に行き着きますから」

「そう、分かった。じゃ、気をつけて」

薄暗闇の中を歩き始めてすぐ、まばらではあるが自分の他にも歩いている人影が確認できる。きつとこの人たちも動きだしたという情報を聞きつけて、大江戸線の「都庁前駅」に向かっているのだろうと思ひ、この人の流れの方向に行けば辿りつけるに違いないと確信する気持ちが湧いてきた。

何百メートルか歩いた時、ふと人の影が途切れて独りで歩いていることに気づく。途端に心は不安の中に引きこまれてしまっている。きつとこの界限に勤務するサラリーマンやOLたちは、ビル谷間の路地を抜けて、最短で辿り着く術を知っているに違いないのだ。そんなことを考えてオロオロと歩いていた時、あるビルの前に守衛らしい姿があった。一瞬は警ら中の警察官かと思つたが、衛兵に似た制服に身を固めた丸腰姿がそうでないことを示している。

「あの、大江戸線の駅はこっちの方向でいいんですよね」

「はい。そうです。もう少し行けば表示が見えます」

三〇代前半と思える守衛にお礼を言つて歩きながら、あの守衛は、駅を尋ねた通りがかりの男が東京都の職員、だと思つたら、あきれ返つて一体どんなことを口走るのだろうと思つた。感心できることではないが十八歳で鹿児島から出てきて、四十二年間勤め上げて退職したことはしたが、中身は根っからの田舎者のままでこの歳になつてしまつている自分に改めて気づかされる。一刻も早く、とりあえず事務所まで無事に戻りたいという焦りの気持が強いながらも、そんな思いが頭をかすめる。

駅までもう少し歩くのかと思つていたら、すぐ近くに入口があつた。階段をおりて、改札に近づくと従つて人ばかりは通路一杯になつている。人ごみの中を分け入つて進もうとするが、改札口まで辿り着けない。

「大変ご迷惑をおかけして申し訳ありません。ただ今ホームは一杯で危険な状態となつていますので、もうしばらくお待ちください」

駅員のハンドマイクを通した声が聞こえてくる。このような風景につきものの、声を荒げた抗議や酔っぱらいの怒鳴り声もない。人身事故や車両故障を引き起こしたことや対応のまずさを責めたてるいつもとは明らかに異なつていて、閉ざ

された改札口の前はまさしく、頼むから早く動いてくれ、そして家族の元へ俺たちを連れて行つてくれとすがる人の群といつてよかつた。

約二〇分待たされて開いた改札から、ノロノロと上野御徒町方面のホームのまん中へ進む。反対側のホームも六本木方面の乗客であふれかえつている。皮肉なもので、向こうは五六分か一〇分間隔で電車が入つてくるのに、こちらは二〇分待つても三〇分待つてもなかなかやつて来る様子が見受けられない。恨めしげに見つめていてあることに気づいた。こちらでもそうだが、混みあつたホームに赤ちゃんを載せた乳母車を押す若いお母さんや、杖をつく老人の男性や女性がやけに目立つことだ。人のひしめきあうホームの上をおぼつかない足取りで歩いている高齢者の姿や、ホームの最前列で乳母車の取っ手に、両手でしがみつくようにしてこらえているお母さんを見ると心配ではらはらしてしまう。余震やアクシデンツが原因でパニック状態になつてしまつても、子どもの身や自分の身を守る自信があるのだろうか。少しでも早く家族のところへ安心できるところへ帰りたい思いは分らないでもない。私だって同じ思いでこうしてここに立っている。しかしやはり、先ほど覗いた都庁のホールのような安全な場所で、事態が落ちつくのを待つべきだったのではと思えてなら

ない。そういう考えにいきつくと、自分の目つきが冷ややかに  
なっていくのを感じて視線をそらした。

十一時過ぎになって、ようやく滑りこんできた電車に乗る  
には乗ったが、一駅着くたびにごっそり下りる人と逆にどつ  
と乗ってくる人との押し合いへし合いが続き、軋み音をあげ  
ながらやつとのことでドアが閉まっても、今度はなかなか発  
車しない。この状態を駅ごとに繰り返して上野御徒町駅に着  
いたのは乗ってから五〇分位あとのことで、事務所に到着し  
たのは都庁の第二本庁舎を出てからおよそ二時間後のちょよ  
ど十二時だった。

帰宅できずに居残っている上司や同僚からねぎらいのこと  
ばに迎えられ、無事に辿り着けたという安堵感にひたりなが  
ら不意に観たテレビ画面の映像に、絶句してその場に立ちつ  
くした。

防波堤をいとも簡単に超えた津波は、家やコンクリート  
のビル・電柱・車といった街並みの全部をのみこみながら陸  
地の奥へ奥へと突進していく。

—— 地獄だあーっ！ 地獄だあああーっ！ ——

高台に上がって難を逃れた初老の男性の悲痛な叫び声。脅  
えて泣きじゃくる少女たち。渦を巻いて走る波の上で、まる  
でタライの中のオモチャみたいは何十台もの車がなす術を失

って激しくぶつかりあっている。

「タイヘンなことになってるんだ」

画面を呆然と見つめる脳裏で、津波は人が避難した街を襲  
っているのか、あの車の中には人がいるのかいないのか。た  
だ、自問自答をくり返す。一方で、映画のシーンを観るよう  
に、波間に、必死に助けを求める人の姿を垣間見ようとする  
自分がいる。

無言のまま自分の席に行く。昨日の午後に都庁舎へ出かけ  
る時、脇机に積み上げたままになっていた書類が、机の上に  
なだれこんでパソコンが下敷きになっている。担当している何  
本かの、工事現場の書類がごちゃ混ぜになるのが気になった  
が、そんなことはどうでもいいような気がして、かき集めて  
とりあえず積みなおす。

画面は、東京電力福島第一原子力発電所の映像に変わって  
いる。飛行機の上からかそれとも望遠カメラか、かなり遠くか  
ら写しているように見える。霞みがかかった画面の建物あた  
りで、突然、放射状に何かが飛び散る。爆発かと思ったそれ  
は、津波が発電所を襲った瞬間の映像であることをアナウン  
サーが告げている。このあと制御不能に陥った。信じられな  
いような光景だ。

放射能、放射性物質といったことを思い浮かべつつ、チ



エルノブイリと重ねていた。更衣室に行つて作業着に着替え、インスタントのカップ麺で腹ごしらえをした。席に戻ると、どす黒い蛇の舌のような波が、大地を舐めるようにして山の方に猛烈な速さで突き進んでいく。やがて津波は街を呑みこんで海と一体になり、大きな貨物船が家屋をなぎ倒しながら川上に向かって流されていく。雪の降る中、容赦ない津波の様を、丘の上から呆然と見つめる老婆、身を寄せあうようにしてただ泣き叫ぶ子ども達。

—— 何が防波堤だっ！ 何が防潮堤だーっ！ ——

突然、画面がやみくもに揺れはじめ、逃げろっ、早くっ！ 男の金切り声。その声は、ビデオカメラを回す本人のもの、迫ってくる津波を背に、必死に逃げているのだ。

気仙沼や仙台・福島といった被災地の映像が次から次へと映し出される。前の席の同僚二人は工事の書類整理に余念がなかったが、二つの椅子を引き寄せて体を横たえた。

電気をつけっ放しにした部屋で、うとうとしたようなそうでないような感覚のまま朝を迎えた。テレビは避難所の被災者の姿をズームし、大津波によって一変した街並みや漁港・波止場の、目を覆うようなありさまを映している。明るくなると共に各地の痛ましい実態が明らかになっていく。死者や行方不明者数は一万人を大幅に超える数になるという。

宮城県の前を聞いて気になる人がいた。一人はアルゼンチンの日系人の女性で、六歳の息子さんの『もやもや病』という脳の血管の難病を治療するために、家族四人で日本に来ていて、今、仙台市の青葉区に住んでいる。もう一人は埼玉に住んでいたのだが、故郷の気仙沼に帰って暮らしている男性だ。無事でいてくれるとは思つたが、通信機能が落ちついたら連絡をとつてみなければと思ひながら画面を見つめていた。

九時を過ぎた頃、各現場の業者の監督員に電話をかけた。

一番気になつていた砧公園の吊橋の現場は、杭打ち機が転倒するようになつてもなく、すでに打ちこんだ基礎杭も支障はないらしかった。東京湾の臨海防災公園はモノレール『ゆりかもめ』の有明駅のすぐそばだ。ここの舗装工事のところは、液状化が危惧されたが、あらかじめセメント系の材料で盛つた土を固化してあつたので心配ないとのことだ。谷中霊園の工事は園路に貯留浸透のための浸透管を埋めて、その上を透水性のアスファルトで舗装するものである。工事そのものに被害はなかったが、お墓のあちこちで倒壊が発生しているという。あれだけの大きな地震がくれば、古い墓石はひとたりもないことは明らかだった。

ひととおり電話をかけ終わり、たまっている業者からの提

出書類の整理でもしようかと考えたが、たび重なる余震やけだるさなどから手をつける気がしない。自分の席でぼうっとしている、なにやら設計係の数人が上野広小路界限まで食事に行くという。朝食はまだだったので、連れて行ってもらうことにする。

日が高くなり、陽射しがやけに眩しい。不忍池のそばの喫茶室や広小路の御徒町寄りの店などに行つてみるが、満席らしく入口には列ができている。同じように帰宅できなかった人たちだ。広い通りから一步入った御徒町側の路地には、帰れなかつた人たちを当てこんで、朝から開店している飲み屋があちこちにあり、路上まで煙と一緒に焼き鳥の香ばしい匂いがたちこめている。心当たりを二、三軒まわつたが皆同じだ。仕方がないので、コンビニエンスストアでおにぎりでもと思つて立寄つた。弁当やおにぎり、サンドイッチ類が並ぶはずの棚はどこも空っぽだ。

「すみません。どこか一軒ぐらいは何とかなると思つたんですけど」

ずっと年下の同僚は申し訳なきようにそう言つて、たつた今歩いてきた繁華街をふり返る。目的を果たさないうまま手ぶらで事務所へ戻り、昨夜と同じカップ麺と庶務係がさし入れてくれた防災用の非常食である「山菜おこわ」で腹を満たし

たのだつた。

午後3時過ぎになつて、工事係の電話が鳴りだした。砧公園の橋の現場からだ。仕事はしていなかつたが待機していて、その報告をくれたのだ。二十六メートルの基礎杭を打っている最中に地震にみまわれたので、杭打ち機械をセットしたままで一時中断していたからだ。公園の中を流れる小川の、地形の不安定な場所に鉄板を敷いて機械を据えていた。

「どうなることかとヒヤヒヤだつたんですけど、おかげ様で変つたようなこともありませんでした」

現場代理人のほつとした甲高い声が受話器を通じて耳に響く。

受話器を置きながら、脳裏に焼きついた幾つもの映像のことを思う。防波堤をまたぐようにして難なく超えていく津波。それはまさしく、日本が誇つていた建設技術がまたもやもろくも崩れた姿でもあつた。そう思つたのは、十六年前の阪神淡路大地震の時、あの高速道路の桁が横倒しになつて地面に転がつた姿を目の当りにした記憶だつた。公務員という立場とは言え、働く場所を四十五年近く土木技術の一端に身をおいてきた。自分自身が直接携わるか否かは別にして、世界をリードしながら絶えず進歩することに、まんざらでもない感情を抱いていたことは否定しがたいことだつたと言つてよか

った。

三日前、吊橋の杭を打つ現場に担当者として立会った。長さ二十六メートルの杭の長さは予め調査した地質の層で決めている。先端を支える地盤をN値50という既定の硬さを持つ層としているが、今回の現場の杭の先端が所定の深さで間違いないか否かを、地上から吊下ろした試験体の沈下率で測定する。そのようにして土木の構造物であれ建築物であれ支持力の確保を確認してきた。しかしよく考えてみれば、地震大国と言われる日本列島に添う形で太平洋プレート（岩板）とフィリピン海プレートが横たわっているのである。日本の技術者達の英知を駆使した防波堤や橋・超高層ビル、そして日本全国津々浦々に建設されている五十四基の原子力発電所も、その上に存在しているのである。三階の窓から上野広小路の方角の晴れた空を見ていたら、あらゆる建物が浮遊しているように頼りなく見えてきた。

交通機関のダイヤはまだ大幅に乱れてはいるが、JR高崎線も何とか動いているようである。四時過ぎに事務所を出て駅に行く土曜日ということもあって座れた。車内を見まわし、この中には自分と同じように、昨日の地震で帰れなかったという人がいるのだろうかと思う。

埼玉に住んでいて、都内に勤務先を持つ人や学校に通う学

生は相当の数にのぼるはずだ。また、たまたま買い物や用事があって都内にいた人も沢山あり、その日に帰れなかったり、何倍もの時間をかけてやっとの思いで帰り着くことができたという人も多かったに違いない。そんなことを考えたのは最初だけで、すぐにうとうとしだした。

私が自宅に帰り着いたのは夕方だった。

「お帰り、大変だったわね」

連れ合いのことばに頷きながら、リビングの方に目をやると、ソファの下からうさぎのチャアがこつちを見上げている。

「チャアさん、ただいま。大きな地震だったねえ！ チャアさんも怖かったか。うん？」

そう言いながら鼻筋を人差し指の甲で撫でてやると、いつもするようにじっと目を閉じている。テレビの画面には、水素爆発で吹き飛んだ福島第一原子力発電所の1号機の建屋の無惨な姿を写す上空からの映像が流れ、避難区域を半径一〇キロ圏内から二〇キロ圏内へと拡大するようにとの、首相の指示を告げるアナウンサーの姿があった。